

## 自然観と死生観をつなぐ ー終末期患者の視線からー

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ  
岩崎 大

## 死生学 = Thanatology, Death Studies

- ・死を通して生の意味を省察する学問  
哲学、宗教学、解剖学、生物学など
- ・死に関わる現実問題に対する、諸研究を統合した実践学
  1. 医療現場（終末期医療、尊厳死、中絶、死別悲嘆など）
  2. 教育現場（自殺、いじめ、犯罪など）
  3. 死生観の空洞化（死が意識されない社会）

## 日常で死を考えることは無意味？

- ・「死とはなにか」は認識不可能
- ・死の危険や他者の死の経験の僅少化による、実感のなさ。
- ・死は恐れと悲しみの対象。語ることは不謹慎。
- ・宗教性の希薄化による、現世の意味づけのなさ。

「死は、わからないし、嫌だし、  
まだ自分には関係ないし、考えても不幸になるだけ」

## 終末期医療の緩和ケア

- ・私（あなた）の現実の死が切迫している。
- ・死にゆくこと(Dying)の恐怖、死そのもの(Death)の恐怖。
- ・身体機能、社会性、関係性の喪失。
- ・専門的対応と、生と死の根本問題へのスピリチュアルケア。

「不要であった死への意識が、医療という公的空間で切迫した問題として顕在化し、社会的対応を求められる」

## 緩和ケア・ホスピスプログラム

「緩和ケアとは、生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に対して、痛みやその他の身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題を早期に発見し、的確なアセスメントと対処（治療・処置）を行うことによって、苦しみを予防し、和らげることで、クオリティー・オブ・ライフを改善するアプローチである」（WHO,2002）

プログラム：緩和ケア病棟、独立型ホスピス、在宅ホスピス

## ホスピス病棟





## ホスピスボランティア

傾聴・部屋掃除・庭掃除・配膳・小物作り・生け花・イベント参加・散歩補助・入浴補助・マッサージなど



## 風景としての 人と自然



## 意識の変容

生と死への切迫した意識+緩和ケア

→目の前にあるいのちと自然への意識の変容（プロセス）

- ・「生命飢餓状態」の自覚
- ・他者との惜別、後悔
- ・「自然が美しいのは、僕の末期の目に映るからである」  
(芥川龍之介)

あらゆる体験が「生と死」の文脈から受け取られる

## 死生観と自然観

自然観に基づく死生観

- ・自然のなかにいる人間（←支配・養育の対象）
- ・人間が生きたためのいのちを与える自然
- ・死後、還る場所としての自然
- ・祖霊が見守る場としての自然（お迎え体験）

自然といのちの意味づけと、尊さの自覚

## 死生観と自然観と世界観

大きな物語：

- ・神が世界を創造し、人間に被造物（自然）の支配を託し、信仰に生きた人間は肉体の死後に復活して天国へ行く。
- ・この世界のあらゆるものに命が宿っており、意味なく命を奪えば、来世で苦しむことになる。

死生観＝自然観＝世界観

## 死生観と自然観と世界観

現代：

死生観：死後の世界とはどんなものか（非科学的な信仰）

自然観：文明と自然の関係性（環境意識）

世界観：世界はどのように成立したのか（科学的解明）

断絶と希薄化

生の態度を規定しない（切迫感のなさ）

	関係	危機(契機)	危機の性質	危機の社会性
死生観	生と死	終末期の臨床	死は不可避	個人的問題だが、医療現場においては社会的問題
自然観	人間(文明)と自然	環境問題	解決可能	社会的問題だが、個人の利害が不透明あるいは無害

いのちの危機→生と死の意識→切迫感のある体験  
→死生観と自然観の変容  
(自然といのちの尊さの自覚)

## 危機

意識可能な現実の限界状況の現れ。

希薄化、断絶した死生観と自然観をつなぐ契機。

ただし、この契機に対する生の態度は多様

1. 「関係ない」「考えたくない」(逃避・利害)
2. 現実に絶望する抑鬱状態
3. 限界内での意味づけと態度の変容（自己肯定）

危機を自らの危機として受けとめ、苦悩しつつ、  
他者のサポートによって生の態度を規定していく

## まとめ 1

- ・自らの生の意味づけや危機意識が希薄化する現代
- ・現代の死を担う終末期医療の社会問題
- ・環境問題は、自己の危機として実感しがたい
- ・「いのち」の文脈において、人間は自然のなかにある
- ・緩和ケアが死生観と自然観の変容と結合を促す  
→自然といのちの尊さの自覚

## まとめ 2

- ・自然といのちの尊さの自覚は、(将来世代を含む)他者配慮、自然保護といった環境配慮行動につながる
- ・死生観の変容、濃密化は、生の問題と環境問題に応じるための基礎になりうる
- ・終末期患者の経験を、日常社会へと拡張するための死生学的環境デザインが必要